BURST CITY 9
1994.2.15 No.
For Revolutionary Resistance
300円
A.R.P
ARP
P.O.Box57
Sakyo Kyoto
606, JAPAN
FAX +81/75-781-1253

サパティスタ民族解放軍（ＥＺＬＮ）一斉蜂起で主要都市を制圧

〈メキシコ〉チアパス州

１月１日、メキシコ東南部、グアテマラとの国境に位置するチアパス州で、インディオを主体とする革命組織、『サパティスタ民族解放軍（ＥＺＮＬ＝Ejercito Zapatista de Liberacion Nacional）』が武装蜂起を開始した。所持する武器は、ライフル、ピストル、ＡＫ４７オートマチック・ライフル、マチェーテ（インディオの使用する山刀）などであるが、全体に装備が行き渡っているわけではない。主力部隊は、オリーブグリーンのズボンにブラウンのシャツ、赤いバンダナをつけ、長靴といういでたちであった。

総兵力約2000人のＥＺＬＮは、サン・クリストバル・デ・ラス・カサス（チアパス州の観光拠点）、オコシンゴ、ラス・マルガリータス、アルタミラノなどの市町村を解放した。同時にサン・クリストバル、オコシンゴ、アルタミラノに通じる全ての道路を封鎖し、またオコシンゴとマルガリータス間の電話回線を遮断する。

〈特集〉ＥＺＬＮ武装蜂起

★ラカンドンのジャングルから（戦争宣言・全訳）★戦闘記録　★ＥＺＬＮ機関紙から、『メキシコの目醒め』『女性革命法』★その他、蜂起に関する基本的な資料

ラカンドンのジャングルからの宣言
サパティスタ民族解放軍戦争宣言(全文)

今日、我々は宣言する!
もう、たくさんだ!

メキシコ人民よ!
メキシコの兄弟姉妹たちへ!

我々は、抵抗の 500年の申し子である。抵抗闘争、それは最初に奴隷支配に対して、次に叛徒を先頭としたスペインからの独立戦争としてあった。次に北アメリカ帝国主義による併合を回避する闘い、そしてさらには、我々の憲法を発布しフランス帝国を我々の土地から追い出すための抵抗であった。さらに下っては、ポルフィリオ・ディアス独裁政権が改革諸法(註①)の公正な適用を拒絶して、人民が反逆し、ヴィジャやサパタのような指導者が現れたのである。彼らは、ちょうど我々と同じく貧しい人々であった。

支配権力は、我々を砲火の餌食とし、我が国の富を略奪するために、我々の最も本質的な存在基盤を奪い続けてきた。支配権力は、我々が何も持っていないことなどお構いなしでいる。我々には、雨つゆをしのぐ屋根も、土地も、仕事も、医療も、食料も教育さえもない。そう、我々には、全く何もないのだ。我々は自身の政治的な代表を自由かつ民主的に選ぶこともできず、外国からの自立も、我々自身そして子供たちには平和のみならず正義さえもないのだ。

しかし今日ここに、我々は言おう。もうたくさんだ!我々は、我が国土を真に建設した人々の後継者なのである。全てを奪いつくされた無数の民である我々は、ゆえに、兄弟姉妹たちに、たった一つの道であるこの闘いに参加するよう呼びかける。この闘いは、我々が、最も保守的な裏切り者グループを代表する売国の輩どもの敷いた70年にわたる独裁のあくことなき野望によって、飢え死にしないためのものである。

この輩どもは、イダルゴ(註②)とモレロス(註③)に反対し、ビセンテ・ゲレロ(註④)を裏切り、わが大地の半分を外国の侵略者に売り渡し、我々の国を支配するためにヨーロッパの帝政を持込み、「科学的な」(註⑤)ポリフィスタ独裁制を作りあげ、油田の収用に反対し、1958年に鉄道労働者を、1968年には学生たちを虐殺し、そして今、我々から全てを、まさに全てを奪っているのだ。

これらを断じて阻止するために、また我々の最後の望みとして、我々の憲法にもとづく、あらゆる合法的な手段を実効化させるための試みをなしたのちに、憲法第39条の適用を目的とし、これに訴える。

「国家の主権は、本質的に、かつ本来、人民に存する。全ての政治的権力は人民に由来し、その目的は人民に役立つためのものである。人民は、いついかなる時でも、政体を変更、もしくは修正しうる譲渡できない権利を持つ」。

我々に苦しみを与え、今日、権力を最大限に保持、発動している不法な連邦の実力者、サリナスによってもたらされた、一党制支配独占によるメキシコ独裁政権の柱たるメキシコ連邦軍に対して、我々はそれゆえ、憲法に従って以下のように宣言する。

この戦争宣言に従って、国民による他の権力が、この独裁者を打倒することによって、正当性を回復し、国民の安定状態を提唱するよう、我々は要求するものである。我々はまた、国際的な諸組織と国際赤十字による監視、そして戦闘行為の規制、調整を求める。これは、我々が一般民衆を守りつつ我々の努力を成し遂げることを目的としているからである。我々はいかなる時でも、ジュネ

ーブ協定に従うことを宣言する。ＥＺＮＬは、我が解放闘争の、戦う武器として形成されたのである。

メキシコ人民は、われらの側にある。我々の反乱戦士たちに敬愛を受ける愛すべき三色旗を、我々は掲げている。ストライキに際しての労働者のシンボルである黒と赤を、我々はユニフォームに使う。ＥＺＮＬ、サパティスタ民族解放軍と書かれた我が旗を、我々は常に闘いの中で掲げるのだ。

あらかじめ言っておくが、麻薬業者やドラッグゲリラ、盗賊、その他、敵がいかなる呼称をもって我々の正義を辱めんとする策謀をめぐらそうとも、我々はこれを拒否する。我々の闘いは、正義と平等を求める崇高な憲法に従っているのだ。

ゆえに、この戦争宣言に従って、我が軍隊、ＥＺＬＮに対し、以下のとおり指令する。

⑴メキシコ連邦軍に打ち勝ち、首都に進撃せよ。進軍に際しては、一般住民の防衛に留意し、解放区の人民が自由かつ民主的にその主権を選択することを許可せよ。

⑵捕虜の生命は保証し、負傷者は国際赤十字に引き渡せ。

⑶外国人によって訓練を受けたり金で雇われた全ての連邦軍兵士と政治警察官、裏切り者として告発された者たち、民衆を抑圧したり不当に扱った者たち、善良な人民に対して略奪や盗みを働いた者たちに対して、略式裁判を始めよ。

⑷敵兵であろうとも、戦うことなく投降したり、ＥＺＬＮ総司令部の指令に従うことを約束した者たちも含め、我々の闘いに共感を示した全てのメキシコ人とともに、新しい軍勢を作り上げよ。

⑸生命が失われるといった事態を回避するために、我々が何らかの戦闘行為を開始する前に、敵の頭目たちが無条件降伏するよう求める。

⑹ＥＺＬＮが管理する地域での、我々の資源の奪取行為は止めよ。

メキシコ人民よ！我々すべては、今ここに宣言された戦争こそが、我々の最後のたった一つしかない手段であると認識している。独裁者たちは長年にわたり、我が人民に対する宣戦布告なき殲滅戦争を行ってきた。ゆえに我々は、諸君の参加と、この計画への支援の決意を必要としているのだ。これは、仕事を、土地を、家を、食糧を、医療を、教育を、そして、自由、独立、民主主義、正義と平和を求める戦いなのだ。

我々は宣言する。我々の人民が、自由かつ民主主義のもとに、我が国の政府を創り出すという、人民の基本的な欲求が満たされるまで戦いを止めない。

ＥＺＬＮの叛乱軍に合流せよ！

1993　ＥＺＬＮ総司令部

（この宣言は、ＥＺＬＮの機関紙に掲載され、また、蜂起の初日に、サン・クリストバルで発表されたものの全訳である。　編集部）

占拠したサン・クリストバル市庁舎前を防衛するＥＺＬＮの戦士たち

〈訳註〉

【註①】改革諸法

1857年の自由主義憲法発布にともない、政教分離と教会権力の剝奪を目的として公布された一連の法律と法令。

【註②】イダルゴ

ミゲル・イダルゴ・コスティジャノ。1810年９月16日に始まるメキシコ中央部バヒオ地域の住民約10万人の蜂起を指導した、ドローレス村の教区司教。スペインからの独立を求める蜂起軍はメキシコ中央部の主要都市を制圧したが、態勢を建て直した植民地軍に破れ、翌年の３月に蜂起は敗北した。７月31日にイダルゴは処刑される。

【註③】モレロス

ホセ・マリア・モレロス。イダルゴの蜂起軍に参加した教区司教。蜂起軍の敗北後、メキシコ南部で独立運動を展開した。メキシコ市を包囲した独立蜂起軍は、1813年ゲレロ州チルパンシンゴで議会を開催し、独立のための政治綱領を起草。翌年１月には、アパチンガン憲法を発布する。この中では、インディオが大地の主人であること、大土地所有制の解体、身分制度の廃止、主権在民と普通選挙がうたわれた。しかし、1815年に植民地軍に破れる。

【註④】ビセンテ・ゲレロ

1815年の蜂起軍敗北後、メキシコ各地でゲリラ戦を続けた指導者の一人。1820年、スペインで自由主義革命が起きたことに危機感をいだく保守層は、むしろスペインから離れて穏健な国家として独立する方が得策と考えた。この意向を受けた植民地軍の一部が独立派に寝返った。ゲレロは、これと協定を結び、「イグアラ計画」（実質的な独立宣言）を発表した。1821年夏にはメキシコ市を占領し、８月24日に事実上の独立が達成される。

【註⑤】科学主義（者）

1890年代に台頭した政治潮流。序列にもとづく秩序と科学による進歩＝物質的な繁栄と規定する立場から、反自由主義、白人至上主義を掲げてディアス独裁政権を支えた。

蜂起の背景

チアパス州はメキシコで最も貧しい州といわれる。その大半は密林と高地で、マヤ系インディオが全域にわたって生活している。蜂起の中心地である、サン・クリストバル南東部からグアテマラ国境にかけては、ツォツォル、ツォルタルが、そこから北へあがったパレンケ周辺にはラカンドンが居住する。

インディオは常に社会の底辺に押し込められて来た。メキシコ革命以降、一定の土地の分配、共同所有地の復活がなされてきたが、これらの土地の再収奪が進められている。現在の支配政党である制度的革命党（ＰＲＩ）と結びついた大土地所有者は、未だに公然と土地の強奪を続けている。そして、植民地時代とほとんど変わらない半奴隷制度が今も存在しているのだ。

また近代化政策のもとでの熱帯雨林の「開発」は、インディオの生活基盤である生態系そのものを破壊し、インディオ社会を崩壊に追い込もうとしている。ＥＺＬＮが主張する「我々には、何もないのだ」ということは、決して大げさではない。

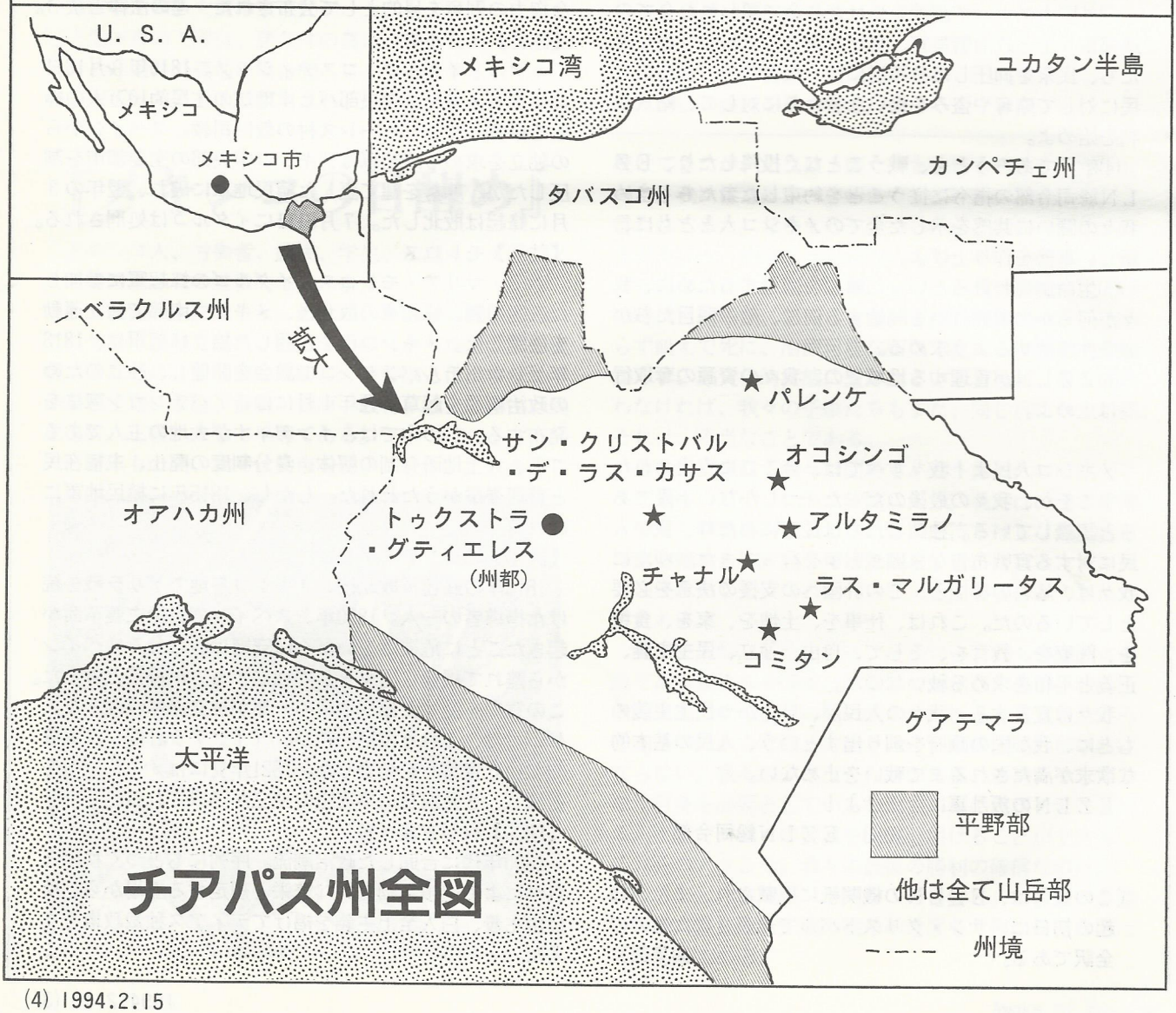
歴史的にメキシコ南部諸地方のインディオは長らく抵抗を続けて来た。現在も土地問題を巡る「紛争」はこれらの地域で頻発している。今回の蜂起がこれだけの規模で行われた背景には、インディオの抵抗の歴史と地域全体での解放への欲求が厳然として存在していることがあげられる。

また、蜂起の開始が北米自由貿易協定（ＮＡＦＴＡ）の発効の日であったことは、より一層問題の所在を明確にしている。ＮＡＦＴＡによってメキシコの農業、とりわけ貧しい農民、インディオは大きな打撃を受けることとなる。北から流れ込む低価格農産物が、南部のトウモロコシなどの主要生産物を駆逐していくことは明らかだ。

メキシコ全体においても、市場開放を軸とする資本主義の加速度的な展開は、メキシコ経済の「先進諸国」への従属化を一層押し進め、労働者に低賃金を強い続ける結果しかもたらさない。これに対する闘いは、文字通り生存をかけた闘いなのである。

今回の蜂起は、決して地域的に限定された性格を持つものではなく、新世界秩序のもとに革命勢力を抑えつけながら資本主義による世界支配をもくろむ帝国主義に対する、断固とした革命的蜂起としてあったことを認識する必要があるだろう。

（編集部）



戦闘記録

1/1～1/16

サン・クリストバル市内をパトロールするＥＺＬＮの戦士たち

一斉蜂起に先立つ1993年12月29日、ＥＺＬＮの攻撃部隊は、サン・ミゲル・パタテに５台の３トン・トラックを待機させた。翌30日には、サン・ミゲルを制圧する。この町は、オコシンゴとアルタミラノの間に位置しており、周辺はインディオの集落が点在するジャングルである。ここを攻撃拠点として、ＥＺＬＮは31日、まずオコシンゴへ通じる道路を遮断した。

【１月１日】

午前０時を期して行動を開始した 800人のＥＺＬＮの部隊は、サン・クリストバル・デ・ラス・カサスを解放した。これに先立ち部隊は、州都トゥクストラ・グティエレスに通じる道路を、市から６キロの地点で切り倒した木で封鎖した。さらに街に近い２ヵ所のガソリン・スタンド（国営ペメックス石油）を接収し、トラックに積んであった1566キロのダイナマイトと 14000個の雷管を入手した。

朝の６時に、市庁舎前に結集した部隊を前にして、マルコス司令官は最初の宣言を発した。黒地に赤い星が配されたＥＺＬＮの旗が高々と掲げられ、拍手が沸き上がる。

市庁舎を占拠したＥＺＬＮ部隊は、政府の書類等を焼却し、全てのドアは破壊され、屋内の家具は運び出されてバリケードを周囲に築くのに使われた。

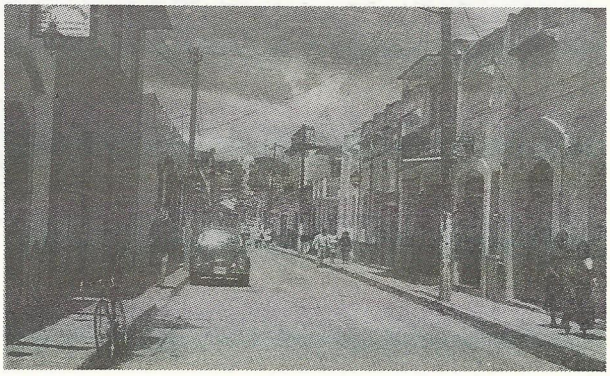
記者会見したＥＺＬＮは、「先住民は不当に土地を収奪されている」「先住民地域の貧困問題に社会の目を向けさせるための行動」などと発表した。街のいたるところに「土地か死か」、「ＮＡＦＴＡ反対、我々は自由を望む」などのスローガンが書かれた。

また、旅行者の質問に対してゲリラ戦士は、「我々はメキシコでの先住民族の処遇に抗議し、世界の人々に苦しみを知ってほしいのだ。チアパス州で活動する多国籍企業が住民に対して本国と同様の賃金を支払うよう要求する」などと述べた。

ＥＺＬＮは午後７時に集会を呼びかけ、様々な階層から1500人もの人々が集まった。同市の人口は８万人である。（この日発表された『ラカンドンのジャングルからの戦争宣言』が本紙に掲載されているものである）。

オコシンゴ（サン・クリストバルから東へ80キロ）では占拠したラジオ局「クセオチョ」を通じて放送を行い、「戦争宣言」やＥＺＬＮの要求を流した。放送は、この地域のマヤ系主要諸言語でおこなわれた。合間には、インディオ農民の歌も流された。

アルタミラノで病院を接収したＥＺＬＮは、戦闘で傷ついた者の手当てを行った。もちろん、政府軍兵士も平等に扱われたことは言うまでもない。



サン・クリストバル・デ・ラス・カサス市内

インタビューを受けるＥＺＬＮの司令官（１月１日）

【１月２日】

市庁舎に火を放った後、サン・クリストバル・デ・ラス・カサスからＥＺＬＮの主力部隊は移動し、約10キロ程離れたチンチョ・ヌエボ政府軍基地を包囲し攻撃。この基地は、政府軍の第31軍管区司令部が置かれている規模の大きなものである。政府軍兵士５人が死亡、ＥＺＬＮ側には、14人の損害が出る。ＥＺＬＮ側の死者は基地の手前でマイクロバスに乗って移動中の部隊が政府軍と遭遇し、待ち伏せ攻撃で全員死亡したものである。これが最初のＥＺＬＮの損失となる。

国際赤十字の使用している建物が、政府軍のヘリコプターによる攻撃を受け、３人の負傷者が出る。

また、ＥＺＬＮは、ラ・フロリダとラ・ビルゲンの２ヵ所の橋を爆破し、政府軍の作戦展開を阻止せんとする。

午後になって、ＥＺＬＮ主力部隊の去った同市に政府軍が進出する。政府軍は、市に近いロス・スミデロスにヘリコプターで運ばれ、徒歩で警戒移動して来ていた。軍の支配下に置かれた街には、午後７時からの夜間外出禁止令が施行される。

しかしＥＺＬＮは、市の周辺で戦闘を展開し、刑務所を制圧。解放された収容者（ 178人）たちは、ＥＺＬＮに合流した。

約40人のＥＺＬＮの分遣隊は、コミタン近くの農場から元チアパス州知事カステジャノス・ドミンゲスと彼の弟とその妻を捕虜として連行した。カステジャノスは、1982年から88年まで知事を努めた退役少将である。

オコシンゴでは、進出してきた政府軍との間で激戦が展開され、この日だけで政府軍兵士と警察官30人、ＥＺＬＮ24人、市民３人が死亡。

ＥＺＬＮは、新たにチャナル・デル・カルメン、ウイクスタン、オクスチュク、グアダルーペ・テペジャックなど、ラカンドン地域のジャングルにある村を政府軍と衝突しつつ、多数解放する。

この日までの死者の総数は、86人。この内、警察官は26人。

【１月３日】

この日も、ランチョ・ヌエボ軍基地への攻撃は続けられる。基地の近くで、２人の記者の乗った自動車が、政府軍の第83歩兵連隊の攻撃を受ける。

オコシンゴ（サン・クリストバル・デ・ラス・カサスから東へ50キロ）での激戦は続き、連邦軍２人、ＥＺＬＮ側には30人の死者が出た。ＥＺＬＮは、市の墓地と公設市場に隠れて政府軍の攻撃を迎え撃つ。

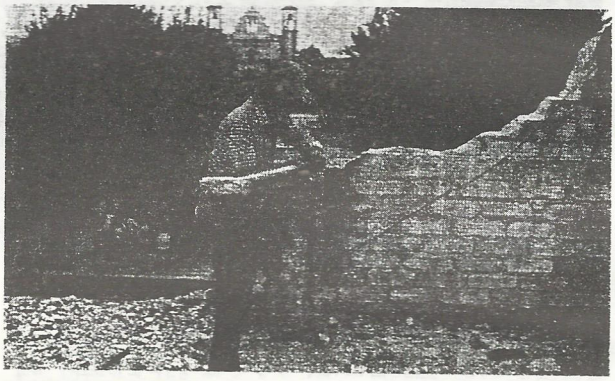
サン・クリストバルには、新たに第75歩兵連隊の3000人が増派され、周辺での戦闘に投入された。

アルタミラノを維持する蜂起部隊は、ハンマーで市庁舎を破壊した。

サリナス大統領は、記者会見で「欠乏と不平等が残り（改革の）効果や機会がまだ多くの人々に具体的には実現していない」と語り、問題の深さを認めつつも、ＥＺＬＮを非難する。

軍は、４都市を奪回したと発表するが、戦闘地域は拡大しつつあり、古代遺跡が多数ある観光地、パレンケ周辺にもおよびつつある。

１月３日、アルタミラノの市庁舎の壁をハンマーで打ち壊すＥＺＬＮ戦士



【１月４日】

オコシンゴ、政府軍に奪回される。しかし、断続的に狙撃部隊による抵抗が続く。軍基地への攻撃も続く。

この日、ＥＺＬＮは、市町村からの撤退を開始する。

トゥクスラ・グティエレスの空港は閉鎖され、政府軍の使用となる。ここを中継地点として軍が移動する。この日だけで、１万人近くが到着する。

サリナス大統領は政府軍に対して本格的な反撃を指示し、チアパス州各地に続々と政府軍が展開される。サン・クリストバルの野球場は軍の航空基地として使われ、ここから飛び立ったヘリコプター等は、山岳地帯のインディオの集落、エル・カリツァル、サン・アントニオ、エル・オコタル、エル・カラリトなどへの爆撃を開始する。

カトリック教会が対話の仲介を申し入れる。

この日までの死者の総数は、93人。うち政府軍７人、警察官・民間人27、ＥＺＬＮ59人と政府軍が発表。

【１月５日】

ＥＺＬＮは、ほぼ山岳地帯へ引き上げる。しかし、これは敗北ではなく、戦力を十分に保持したうえでの作戦展開であった。

この日もランチョ・ヌエボ基地への攻撃が続き、政府軍のヘリコプターに損害が出た。

連邦軍による本格的な掃討作戦が開始される。戦車や装甲車を投入し、動員数は 15000人に及ぶ。軍は州都ト

ゥクストラ・グティエレスに通じる道路以外の全てを封鎖して、全ての住民と報道関係者の通行を妨害している。また、軍による住民への不当逮捕、テロが始まる。

連邦軍による爆撃は依然として続く。

サリナス大統領は、政府人権委員会に現場での人権侵害の有無を調査するよう指示。これは、無差別の空爆やＥＺＬＮ捕虜の虐殺の事実から逃れるためのポーズであった。事実、オコシンゴでは、後ろ手に縛られたうえに後頭部を撃ち抜かれているゲリラの死体が少なくとも７体以上目撃されている。

また、政府は、ＥＺＬＮとの交渉の用意があることを発表したが、条件として、捕虜の釈放、攻撃の停止、武器の放棄、指導者の身元特定を要求するなど、実質的な降伏勧告であった。

政府軍に虐殺されたＥＺＬＮの戦士

【１月６日】

ＥＺＬＮは、プエブラ（首都メキシコ・シティの東方約 160キロ）とウルアパン（同じく西方約 320キロ）で送電塔を車を使用して倒壊させた。

サン・クリストバルの西５キロの地点で、ＥＺＬＮはテレビ・ラジオ施設を攻撃。これを阻止しようと飛来した連邦軍の航空機に発砲し、損害を与える。

マチェーテで武装したＥＺＬＮの部隊がユイタンの街に入り、デモをしながら通信設備と市庁舎を破壊する。

この日、報道機関にＥＺＬＮの新たな声明がＦＡＸで送られ、要求項目が公表された。その内容は、「政府資産の監査」、「負債を無効とすること」、「殺人、強姦、麻薬密売人を除く全囚人の釈放」などである。

また、ＥＺＬＮ総司令部が発表した前日までの戦闘報告の要旨は以下の通りである。

⑴ＥＺＬＮ側の人的損害；死者９人。重傷者20人。行方不明者は 123人。この中には、連邦軍により（捕らえられた後に）処刑された人数は含まれていない。

⑵政府軍側の人的損害；死者27人。負傷者40人。捕虜 180人。捕虜は無傷で釈放した。

また、少なくとも30人以上の政府軍兵士が、サン・クリストバルの南部山岳地帯で作戦行動中、政府軍の空軍機の爆撃を受けて死亡した模様。

⑶政府軍の軍事物資の破壊と損害；攻撃ヘリコプター３機（１機はオコシンゴで、２機はサン・クリストバルで）。爆撃機３機（サン・クリストバルで）。移動車両15台。４ケ所の警察署。

⑷囚人の解放； 230人を４つの刑務所（サン・クリストバル２、オコシンゴ１、ラス・マルガリータス１）から解放した。

⑸捕獲した兵器；約 207丁の銃器（Ｍ－16自動小銃、Ｇ－３自動小銃、Ｍ－２ライフル、ピストル、ロケット・ランチャー、ショットガン等）。 12660kgのダイナマイト。１万個のＴＮＴ起爆装置。移動用車両20台。多数の無線機（陸軍、空軍、警察の使用しているもの）。

【１月７日】

前日の送電塔攻撃に関して、ＥＺＬＮは声明を発表し首都への進撃を宣言する。

メキシコ国内の全空港など公共機関に厳戒体制が敷かれ、治安部隊が展開する。メキシコ市証券取引所では、爆弾が発見され、一時機能を停止する。

ＥＺＬＮは、報道機関へ政府との対話を求める声明を送る。

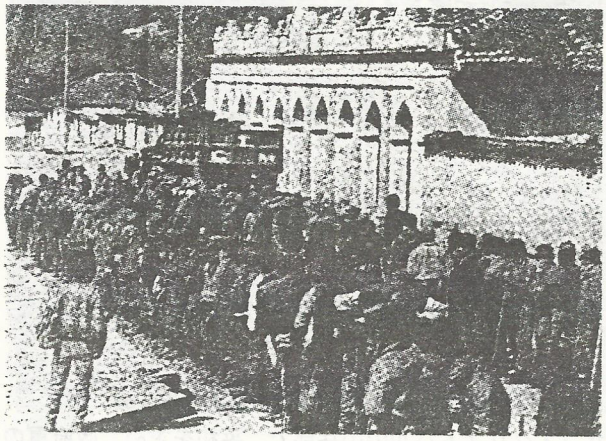
リゴベルタ・メンチュウ（グアテマラ出身のインディオ解放運動の活動家）は、対話による解決を呼びかける。同時に、蜂起した農民の人権を考慮し、先住民族の住む地域の状況を理解する必要性を訴え、蜂起参加者が処罰されたり、先住民族の組織が弾圧されることがないよう要求した。

メキシコ・シティでは、数千人がＥＺＬＮを支援して集会を行う。オアクサカ、ミコアカン州などでも連帯行動が行われる。アメリカのロサンゼルス、サンディエゴ、ダラスなどでも同じく取り組まれた。

【１月８日】

サン・クリストバル周辺でＥＺＬＮは、依然として戦闘を続行。軍基地への攻撃も行われる。

未明に、メキシコ市内にある大型ショッピングセンター「プラサ・ウニベルシダー」の屋内駐車場で、乗用車に仕掛けられた時限爆弾が爆発。現場近くに、「ＥＺＬＮがすでに（メキシコ市に）ついた」とのスローガンが書かれていた。また、別のショッピングセンターなどで



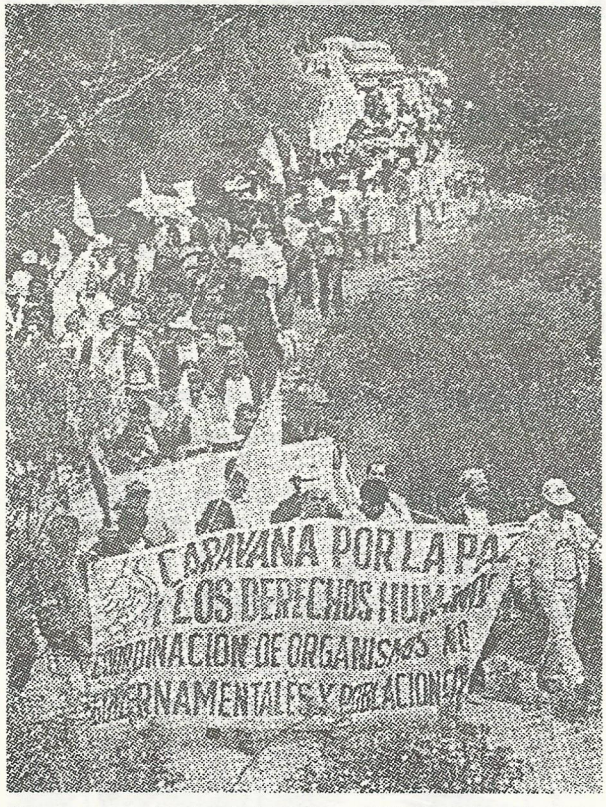
１月６日、ユイタン市内で整列するＥＺＬＮ戦士たち

爆破された自動車（１月８日、メキシコ市）

も事前に爆発物が発見された。報道機関に「地下人民連合労働者革命党」「貧民党」から、「チアパス州での、対ゲリラ攻撃と先住民族への弾圧を中止するよう要求する」との声明がもたらされた。

この４時間後には、メキシコ市南方約 411キロにあるアカプルコの政府庁舎で爆発があり、建物が破壊された。

連邦軍による無差別爆撃が行われているサンクリストバル郊外のサン・アントニオ・デ・ロスバニョスの住民を中心として、人権擁護団体も参加する 300人ほどの人々が無差別殺戮をもたらす空爆の実施に抗議して平和行進を行った。連邦軍はこれを妨害したが、人々は白旗を掲げて行進を強行し、抗議の姿勢を示した。



サン・クリストバルの山岳部で、平和を求め、政府軍の人権侵害を糾弾するデモが行われた。（１月８日）

【１月９日】

人権擁護団体「全ての権利を全ての人々へ」が、軍による人権抑圧の実態を調査するために、激戦の展開されたオコシンゴへ報道陣とともに向かおうとしたが、軍によって阻止された。連邦軍による、先住民族虐殺の隠蔽が行われていることが予想される。

ＥＺＬＮによって政府との対話の仲介役として指名されていたサン・クリストバルのカトリック教会のサムエル・ルイス司教は、その受入れを表明。また、同司教は蜂起参加者への恩赦を求めてもいる。仲介役には、リゴベルタ・メンチュウ他１名が指名されている。政府は、神父の周囲にＥＺＬＮの関係者がいると非難。カトリック教会側は、これを誹謗中傷としてはねつける。

【１月10日】

ＥＺＬＮは報道機関に声明を送り、政府軍が無差別爆撃を停止し、制圧している各市町村から撤退して兵士を基地内に戻すことを条件に、停戦交渉に応ずることを明らかにした。政府が停戦に応じない場合は、首都への進撃を続けると明言。

この日までに、爆弾闘争は９件に達する。送電塔の破壊も、５件あった。メキシコ市では８万人の警官が動員され、公共機関、金融機関などの警備が強化された。

パトリロニシオ・ゴンサレス内相が蜂起の責任をとって辞任。後任にホルヘ・カルピソ検察庁長官が任命された。ゴンサレス前内相は、93年初頭までチアパス州の知事を務めていた。ゴンサレスは、知事時代に先住民族の人権を抑圧したとして告発されている。

ラス・マルガリータスも政府軍に奪回される。

【１月11日】

チャナル村などへのＥＺＬＮの攻勢が続く。

前日、「チアパス州平和和解委員」に任命されたマヌエル・カマチョ前外相は、ＥＺＬＮとの対話をする意志があることを表明した。この中でカマチョは、ＥＺＬＮを公式の組織として認める姿勢を明らかとしている。

【１月12日】

主要地域の市町村が軍の制圧下にあることを踏まえ、サリナス大統領はチアパス州の連邦軍に停戦を指示した。ただし、攻撃を受けた場合は、応戦せよとの条件付き。

【１月14日】

政府軍は、チアパス全域に展開していた部隊を、サン・クリストバル等の９市町村に集結させ始めた。政府は、蜂起から２週間目にして、「状況は完全に平静」と発表する。

全国人権委員会は、戦闘地域で95人の住民が行方不明になっていると告発。内訳は、オコシンゴ56人、アルタミラノ17人、チャナル17人など。政府軍による住民虐待が徐々に明らかとなりつつある。

この時点での政府発表の死者数は 107人とされているが、実数ははるかにこれを上回るとの見方が一般的。

【1月16日】

サリナス大統領は「チアパス州の暴力行為のすべての参加者に対し、全面恩赦を与える」と発表。対象期間は、1月1日から1月16日午前11時までとされる。議会に、恩赦法案が提出された。同大統領は、「つらい状況を繰り返さないために，政府は和解と国民団結の道を選んだ」とするが、先住民族を抑圧し続けるメキシコ国家が、ＥＺＬＮの蜂起の規模に恐怖し、さらなる闘いの展開を恐れるあまりの妥協的ポーズであることは明らかである。

【1月29日】

カマチョ・チアパス州平和和解委員は、ＥＺＬＮの提案していた4つの交渉議題を受け入れ、直接交渉開始の条件が整いつつある。両者は2週間以上にわたって、サン・クリストバルのルイス司教を仲介役として文書の交換を続けて来ていた。

合意された和平会談の議題は、⑴先住民族の深刻な生活条件に関する経済的な要求、⑵先住民族に対する差別、文化、伝統への攻撃等に関する社会的要求、⑶先住民族の参加を実現する政治的な要求、⑷交戦状態、暴力的な対立の停止、である。

【∞】

ＥＺＬＮは、抑圧され続けてきた先住民族の男女はもちろんあらゆる年齢層から構成されており、そのほとんどの武装力を温存しているのだ。今回の蜂起は、文字通り『地域ぐるみの解放闘争』として闘われた。先住民族の抑圧の上に資本主義の道をひた走るメキシコ政府が存在する限り、蜂起は終息したわけではない……。

（文中の死者あるいは死傷者の数については、ＥＺＬＮ総司令部の発表したもの以外は、政府側発表に依拠しており、不正確である。現時点では正確な数は依然不明である）。

－編集部

エミリアノ・サパタ

サン・クリストバル周辺では、
政府軍による厳重な検問が続いている。

サパタの理念と行動

ＥＺＬＮが自らを規定するサパティスタ（サパタ主義者）とは、メキシコ革命（1910～1917）の指導者の一人、エミリアノ・サパタに由来する。パンチョ・ビジャとならんで革命の英雄と称されるサパタは、メキシコの虐げられた民衆、とりわけ農民たちに人気がある。

サパタは中央メキシコに位置するモレノス州の小農の家庭に生まれ育った。最初に南部メキシコで大農場主から先住民族農民の土地を守る闘いをはじめたのが1908年であった。彼の指導する武装した農民運動（インディオを主力とする）は「土地と自由」のスローガンのもと、奪われた土地の奪還を進めていった。

1911年にサパタは、「アラヤ計画」を立案した。これにより彼は、大地を本来の正当な持ち主である先住民族に返還すべきことを宣言した。彼の軍隊はこの計画を実行に移し、メキシコ各地を席巻して行った。1914年に革命諸勢力が一堂に会したアグアスカリエンテス会議では、農地改革を全国革命綱領として採択させるのに成功し、メキシコ革命における理念と実践に大きな影響を与えた。

やがて、サパタ派とビジャ派が支持するグティエレス臨時政権と対立するカランサ派は、軍事行動を開始して1915年秋には新たな政府を樹立した。農民たちを中心とするゲリラ攻撃は続いたが、カランサ政権はアメリカの支持を受けて地歩を固め、1917年の憲法制定を持ってメキシコ革命はその動乱期を終えた。

サパタは生まれ故郷のモレロス州に撤退し、1919年カランサ政権の軍隊によって殺された。

サパタの人気が未だに衰えないのは、奪われた大地を本来の持ち主のもとに奪い返すという理念に基づき、大土地所有制の廃止と土地の分配を運動の軸にしていたからである。このことは、今現在も先住民族、農民が奴隷的搾取に喘いでいることの証左でもある。

ＥＺＬＮの求めるもの（機関紙から）

ＥＺＬＮは、機関紙『EL DESPERTADOR MEXICANO（メキシコの目醒め）』を1993年12月に発行し、その方針を明らかにしている。

この機関紙第１号には、１面に「ラカンドンのジャングルからの宣言」（本号１ページに訳出）、続いて、土地、労働、女性、社会保障等の項目からなる「革命法」、「メキシコの目醒め」と題された論説が掲載されている。

《革命法の要旨》

○革命権力を確立し、新国家建設の基礎とするために、解放区に適用する。
○自由かつ民主的に、全ての政府当局を選出する権利の保証。
○現大統領から市町村長までを公金横領の罪で裁判にかける。
○自衛のための人民武装の保証。
○ＥＺＬＮに対する食料供給の義務。
○戦争税支払いの義務。小土地所有者と小規模商業主は月収の７％、大資本家は20パーセント。
○土地所有の上限は、悪条件の農地の場合 100ヘクタール、好条件の農地の場合50ヘクタールとする。
○上限を越える土地は収用され、小農と農民共同体に分配する。
○大邸宅は接収し、数家族で共同使用することが出来る。
○親のいない子供は、地域で養育する。
○外国企業は、自国で支給するのと同等の給与をメキシコ労働者に支払わなければならない。

以上。

今回は、「革命法」の項目の中から「女性革命法」、また同紙の論説を紹介する。

EL DESPERTADOR MEXICANO
Organo informativo del EZLN México
Nº 1 diciembre 1993

Declaración de la Selva Lacandona
Hoy Decimos ¡Basta!

Al Pueblo De México:
Hermanos Mexicanos:

Somos producto de 500 años de luchas: primero contra la esclavitud, en la guerra de Independencia contra España encabezada por los insurgentes, después por evitar ser absorbidos por el expansionismo norteamericano, luego por promulgar nuestra Constitución y expulsar al Imperio Francés de nuestro suelo, posteriormente por el porfirismo que nos negó nuestra existencia como nación, más tarde la Revolución Mexicana nos dio Tierra y Libertad pero pronto cayeron en el olvido, después la expropiación petrolera, la lucha contra la imposición de Díaz Ordaz, hasta llegar a la lucha contra el fraude electoral de 1988.

Hoy decimos ¡Basta! Somos los herederos de los verdaderos forjadores de nuestra Nacionalidad, los desposeídos somos millones y llamamos a nuestros hermanos a sumarse a nuestro llamado como la única opción para no morir de hambre ante la ambición sin límites de una dictadura de más de 60 años encabezada por la camarilla de traidores que representan a los grupos más conservadores y vendepatrias, que tienen a nuestro país postrado ante el capital extranjero y la entrega de nuestra Patria.

Hermanos: Somos producto de 500 años de luchas sangrientas y traiciones, cuando no teníamos ni fusiles ni parque, cuando nuestras armas eran piedras y palos, nos declararon la guerra de exterminio, pero resistimos, cuando nuestros abuelos fueron casi exterminados en la Guerra de Castas, cuando nuestros padres fueron masacrados en Wounded Knee, cuando nuestros hermanos fueron asesinados en Tlatelolco, cuando nuestros compañeros fueron desaparecidos en la Guerra Sucia, cuando nuestros hijos fueron masacrados en Aguas Blancas, cuando nuestros hermanos fueron asesinados en Ocosingo, Las Margaritas, Altamirano, Huixtán, Oxchuc, Chanal, Amatenango, Guadalupe Tepeyac, Morelia, Zinacantán, San Cristóbal de las Casas, Rancho Nuevo, Comitán, Las Cañadas, Palenque, Ocosingo, Altamirano, Las Margaritas, Chanal, Oxchuc, Huixtán

『女性革命法』

ゲリラ部隊の隊長・ラウラ（女性）

わが人民の解放へ向けた正義の戦いにおいて、ＥＺＬＮは抑圧された人民の諸要求と、革命の法と規則の執行とを掲げ、その革命闘争の内に、人種、信条、皮膚の色、政治的立場にかかわらず、女性を組織する。

また同様に、メキシコの女性労働者のおかれている状況を考慮し、以下の革命女性法において、彼女らの平等と正義の正当な要求を具体的に明らかにするものである。

⑴女性は、その民族、信条、皮膚の色、政治的立場にかかわらず、その希望や能力に応じて、革命闘争に加わる権利を有する。
⑵女性は、労働し、正当な報酬を受け取る権利を有する。
⑶女性は、出産し養育する子供の人数を決定する権利を有する。
⑷女性は、地域の諸問題に加わる権利を有し、もし自由かつ民主的に選ばれたならば、その責任を有する。
⑸女性と子供は、その健康と食事に関し最優先の権利が与えられる。
⑹女性は、教育を受ける権利を有する。
⑺女性は、パートナーを選ぶ権利があり、婚姻を結ばされる義務を負わない。
⑻女性は、親類や第三者からの暴力を受けない権利を有する。
強姦あるいはその企ても含め、これは厳しく罰せられるものである。
⑼女性は組織において指導的地位につくことができるようになり、また、革命的武装勢力内部においては、役職に就けるようになるであろう。
⑽女性は、この革命法と規則による全ての権利と義務を有する。

≪今後の予定≫

ＥＺＬＮの蜂起は、新世界秩序に対する人民の《剣》として、世界中の闘う人々を勇気づけている。革命を放棄し資本主義改良派に軌道修正しつつある日本の「左翼」の転向を怒りをもって見据えつつ、本紙は継続してＥＺＬＮの声明等の紹介に力を入れる。次号では、ＥＺＬＮの『１・６声明』、『１・13声明』等を紹介する予定。

また、イギリスの占領支配に対し、戦争を継続しているＩＲＡ（アイルランド共和国軍）総司令部とのインタビューも紹介する。

抑圧・支配が終焉しない限り、闘いは終わることはない。明けぬ夜はないことを信じて……。

サン・クリストバル東南部のインディオの村

EZLNに連帯しメキシコ大使館を攻撃！〈デンマーク〉コペンハーゲン

≪連帯行動声明≫

革命万才！ EZLN万才！

1994年1月17日の夜、我々はコペンハーゲンのメキシコ大使館に対する火炎攻撃を敢行した。この攻撃は、EZLNの同志達に連帯して行われたものである。

EZLNの叛乱は、メキシコ政府の変わることなきギマン的政策ならびに、帝国主義者の設立したIMFや世界銀行などが指導するところのいわゆる構造改革に対して向けられたものである。これは、メキシコの労働者、失業者の大部分にわたって、とめどない生活水準の低下をもたらすであろう。

EZLNの戦士達が「メキシコ先住民族への死刑判決」と呼ぶNAFTAの、アメリカとの間での批准は、まさに良心をかなぐり捨て、大衆の貧困状態に対して、絶対的に必要とされる社会変革よりも、むしろ搾取下の経済成長を継続的に選択していくことの証拠である。

我々は、年頭のEZLNの叛乱は、メキシコの資本主義とその腐敗した政治的支配者の伝統的階級構造への、広範かつ多様な抵抗だと考える。

メキシコ政府は、強力な軍事的抑圧で応じた。市民を含む多くの人民が、最も残忍な方法で殺されたのである。

デンマークの社会民主党政権をも含めた西側の帝国主義諸政府は、これを無視するか、もしくは及び腰の対応であった。

EZLNは、南部メキシコのマヤ系インディオに依拠する、民主的基礎によって組織された解放軍である。EZLNは、社会主義者の社会的移行の自己的規定を展望している。そして、とりわけ、彼らのその闘いの伝統は、エミリアノ・サパタによるメキシコ革命（1910〜17）に由来するものである。

この攻撃によって、我々は心を込めてEZLNの同志達に挨拶する。抑圧と、帝国主義勢力による、様々な、汚辱にみちた策動に対する彼らの闘いは、また、我々の抵抗闘争でもあるのだ。

勝利するぞ！

1994.1.17

EZLNの友（The friends of EZLN in Denmark）

“連帯は、人民の感性である”

カナダでの連帯行動

EZLNの蜂起に連帯し、メキシコ政府の軍事攻撃と無差別虐殺に抗議する闘いが、世界中で行われた。とりわけ、先住民族の闘いが活発な北米では、早い時期から様々な抗議行動が取り組まれた。今回はカナダでの闘いを紹介する。

1月7日、バンクーバーのメキシコ領事館前では、先住民族と反NAFTA活動家ら約 110人によって、ピケが張られた。EZLNの「戦争宣言」が読み上げられ、参加者らは口々に「我々は勝利するぞ！」「軍隊は、マヤの大地から出てゆけ！」などとショプレヒコールを叫んだ。これに対して警察は領事館前を塞ぎ、行動への妨害に出てきた。更には、爆弾が仕掛けられているなどと言い、周辺の車などを捜索するという露骨な嫌がらせも行った。

続いて10日には、バンクーバー市内のアート・ギャラリーで 200人の結集による集会が持たれた。最初にマヤインディオ支援グループからの発言があり、また、カナダ各地のインディアン・ネーションから、リルワ、ミクマク、モホークの代表によるアピールが行われた。次に、アイルランド連帯委員会、クルド・コミュニティー・センター、カナダ・パレスチナ協会からの連帯の挨拶が披露された。集会後、参加者はメキシコ領事館へのデモに出発した。またしても、警察は領事館前で妨害行動に出て、マヤ・インディオからの抗議文を領事館に渡すことは出来なかった。

20日には、再度集会を持ち、翌日はメキシコ民族解放運動（MLN−M）の呼びかけによるメキシコ領事館前でのピケが行われた。今度は、領事館側が領事との面会を許可し、クワギュトル・インディアンと先住民族解放運動の新聞編集者の2名が領事館に入った。領事と面会した仲間たちは、口々にメキシコ政府の弾圧を非難し、先住民族への抑圧の停止を強硬に申し入れた。領事館の内外で抗議の声が渦巻き、闘いは成功裏に貫徹された。

（編集部まとめ）

世界革命運動情報

BURST CITY

For Revolutionary Resistance

★発行　A．R．P

★連絡先　〒606 京都市左京郵便局私書箱57号

ARP

★FAX　075−781−1253

★定期購読料　10号分　3500円

★郵便振替口座

大阪2−252923　ARP

本号 300円